

はじめに

2009年の夏休み、旅行の移動中で飛行機の中で映画『96時間』¹を見る機会があった。そこに映し出されていたのは、若い女性があらゆる手口で拉致され、みすぼらしい小屋に監禁され、麻薬漬けにされ、そして性目的の商売に出されていく、恐ろしい映像だった。日常では考えられないような卑劣な光景を目にし、思わず言葉を失ってしまった。「被害女性がもし自分だったら」、と想像すると同時に、「いやこれはフィクションに決まっている、世界のどこかで現実には起こっているはずがない」、と何度も自分に言い聞かせながらもショックから抜け出せなかった。日本に帰国してからもずっとこの映画のシーンが脳裏に焼き付いて離れず、見た映像が全て現実には起こっているとしたら、子どもたちの将来はどうなってしまうのか、という懸念と問題意識が芽生えた。これを機に、国際犯罪に纏わる子どもの人身売買と性産業及び児童の商業的性的搾取及び **Commercial Sexual Exploitation of Children** (以後、CSEC) の問題について深く調べていきたいと強く感じようになった。翌年、梁石日著『闇の子供たち』(幻冬舎文庫)²を読み、そこでもまた想像を絶するような過激な情景が描かれていた。本書はフィクションではあるものの、それは決して虚構でも誇張でもなく、現実で起こっている事実を取り上げているのだと著者はいう³。私は改めて、東南アジアをはじめとした、世の不条理さとそれを取り巻く社会構造の劣悪さに絶望感を抱き、実態の深刻さとおぞましさに奮興された。だからこそ、目を背けたくなる「終わりのなき問題」、CSECをテーマに論述し、本論を通じてより多くの人々に子どもが直面する危険とリアリティーを伝えたい。

CSECの根絶に向けてこれまでの一般的な取り組みや対策を考察するにあたり、その効果と問題点が浮き彫りにされてきているように見解する。一方、先駆的且つ包括的な対策を作り出し、大きな成果を遂げる団体も見受けられる。2010年8月、カンボジアを拠点とし、CSECの予防活動に取り組むNPO法人国際子ども権利センターC-Rights(以後C-Rightsと称す)が主催するカンボジア・スタディーツアーに参加し、カンボジアにおける子どもの人身売買や売春の現状と同国で行われている取り組みを伺うことが出来た。そこで、子どもの権利条約に基づく、子どもの参加と主体性を実現させる **School Base Prevention Network** (以後、SBPN)の活動を目の当たりにし、その革新的なプログラムに感銘を受け、CSECの根絶において有効な対策となるのではないかと考えた。

本論では、同スタディーツアーでの体験と学びを基に、カンボジアを事例に児童における商業的性的搾取の現状を認識し、政府、国際社会、そしてNGOの3つのレベルにおいてそれらの取り組みを紹介し、根絶に向けてどのような取り組みが有効であるかを考察する。その中で、筆者が現状の中で最も有効性があると考えたSBPNの活動を取り上げ、その効

1 『96時間』ピエール・モレル監督 2009年8月22日公開

2 『闇の子供たち』梁石日著 幻冬舎文庫 2002年11月

3 前掲注2 p474

果と展望を検証するものである。第 1 章では、CSEC に纏わる「子ども」と「人身取引」の定義を明記した上で、CSEC の概要、起こる要因、そして及ぼす影響を考察する。第 2 章では、カンボジアにおける CSEC の現状を取り上げ、同国で起こる独特の要因を考察する。第 3 章では、カンボジアにおける CSEC の根絶に向けて政府、国際社会、そして NGO の 3 つのレベルからそれらの取り組みを紹介し問題点を挙げたうえで、第 4 章では SBPN の具体的なプロジェクト内容とその有効性を検証する。最終章では、上記を考察したうえで CSEC を根絶するためにどのような取り組みが必要なのかを筆者が導き出す。

「将来の夢は何ですか」、「一番楽しかった思い出は何ですか」。これらの質問に答えられない、考えることができない状況に置かれてしまった子どもたちがいるという事実を、私たちは知っているだろうか。あの時描いた将来の夢や心に残っている思い出、これらの掛け替えのない少年・少女時代を、大人の理不尽な理由と欲望によって全て奪われてもよいのだろうか。見知らぬ人とセックスを強要される状況を、「お金のためだから仕方がない」の一言で片付けていいのだろうか。世界は今、劣悪な社会環境から性的搾取を受けざるを得ない、将来を担う子どもたちの自由が余儀なくされる悲惨な現状を、根絶に向けて取り組む必要がある。